

第一分科会討論「学生・市民が担うまちづくり」を振り返って

公益社団法人 相模原・町田大学地域コンソーシアム

古矢鉄矢（北里大学）

1. はじめに

この分科会は、「協働によるまちづくり」の効果として注目される「学生の成長」と「地域の創造」について、事例報告を題材とし、各報告者との討論を通じて認識の掘り下げを試みた。事例は南大阪、京都、相模原・町田の特色ある3つの取組が学生自身や事業推進者から報告された。

「学生の成長」の有様は、事業に関わる意識の変容や社会性の獲得として各報告に述べられている。「地域の創造」は、地域に向き合う学生の関心の高まりや、行政・経済界など連携機関の期待の大きさとして現われている。参加者からは14件（参加者の約2割）の質問を受け、各報告者からそれらに答える形で主題に対する認識を深めた。

2. 「ショートフィルムフェスティバル」によるまちづくり

発表者は南大阪地域大学コンソーシアム難波美都里氏（統括コーディネーター）、辻村真依子氏（大阪芸術大学4回生）。

南大阪では、学生の実践力育成のために社会を取り込んだ「地域一体型教育環境の構築」と、大学の知的資源を活用した「受託事業による地域貢献」を目標に掲げて学生主体の様々な事業を実施している。その一つが、2005年度から事業化した「学生国際ショートムービー映画祭」で、今年第8回となる。

若い才能の発掘と支援及び芸術系学生のインターンシップを目的としたこの取組は、映画祭への出品を通じて、あらたな映像コンテンツを制作する優れた人材の育成に寄与する、高い水準の作品の輩出・流通が映像コンテンツ産業の活性化を促すことを将来的な目標と

している。コンテストは著名な映画監督などを審査員とし、後援・協賛企業には観光協会や広域行政団体、映画産業、放送局、空港会社が名を連ねる。映画祭に出品した学生の発想や技術を活かした「CM商談会」を実施し、企業CM作りのインターンシップの機会も創出している（難波）。

2012度から映画祭をパッケージで提供する取組も始めた。具体的には堺市からの依頼を受け、「学生ショートムービー映画祭 in 堺」を開催する。堺市では、優秀作品を新たな魅力発信ツールとして活用し、学生による堺の魅力発見、学生に堺の魅力を知ってもらうなどして地域活性化を期待している。映像制作を通じて得たものは、①社会に対する問題意識、②有料制作に対するプロ意識、③仕事としての映像制作への関わりであるが、それらを意識の変容として強調したい（辻村）。

3. 「京都学生祭典」の取組

発表者は大学コンソーシアム京都・大西博樹氏（学生交流事業部次長）、田中克哉氏（学生交流事業部主査）。

大学コンソーシアム京都は4つの事業部と総務・広報部で運営されている。学生交流事業部は、「京都学生祭典」のほかに、国際学生映画祭、学生芸術普及事業を受け持っている。

2003年に誕生した京都学生祭典は、「京都三大祭に匹敵する学生の街らしい『祭典』」を合言葉に産官学一体となった取組として、今年10回目を迎える。「大学のまち・学生のまち」の思いのこもった祭典は、大学の枠を越えた学生の力を結集し、行政・経済界・各大学・地域社会と連携しながら、京都の魅力を社会に発信し、それに伴う波及効果をまち全

体に創出し、新しい魅力をこのまちに映し出すことを目的とする（大西）。

2011年度（第9回）の祭典には、実行委員770人、おどり手875人、担ぎ手71人、合計1716人の学生の参加登録があり、過去最多となった。2005年度から始まった創作おどり「京炎そでふれ！」は、12大学に専門サークルが設立されており、高校生や留学生のチームも参加する。「京炎みこし」は平安神宮から学生と市民の安寧を祈って担がれるユニークな神輿として評判である。

祭典は、地域との関わりも深く、夜間パトロール、クリーンアップ活動、打ち水エコ活動、岡崎地域納涼祭や安寧・梅逕地区エコサマーフェスタ、おどり披露やおどり出前教室など、地域市民との様々な交流が「地域と一体となった祭典」を盛り上げている。

京都学生祭典は一種のプロジェクトである。それは学生の動機付けの場であり、行政・経済界・大学・地域の連携による「人材育成の場」である。「Project Based Learning」を通じてさらに学生を輝かせることが、魅力的な京都の創造につながるものとする（田中）。

4. 「情報誌さがまち」による地域情報発信

報告者はさがまちコンソーシアム山根可奈氏（相模女子大学3年）、北澤紗彩氏（青山学院大学2年）。

「情報誌さがまち」は、地域の問題を学生の目線で取材・編集し一般に伝えようと2006年に発刊し、今年6年目を迎える。学生の手による地域情報誌は初めてであり、商業主義とは無縁の視点から地域の問題を取り上げた内容が新鮮であると、市民に好感をもって受け入れられ、地域に欠かせない情報誌となっている。D5版16ページ、年2回各30,000部（フリーペーパー）、通算13号を発行してきた。相模原・町田市内の各公共施設のほか、大学、高校、金融機関、医療機関、周辺自治体など約500か所に置かれ、自由に手に取る

ことができる。

取材編集チーム（12～16人程度）は毎号各大学に募集がある。全員が集まりスケジュールを確認した後、企画⇒取材先の選定⇒取材活動⇒編集⇒校正と取材先への確認⇒印刷⇒発送までの6カ月間の制作工程に入る（山根）。

情報誌制作の効果の一つは、「ゼロから作る体験」である。企画は1チーム3人、計4チームにグループ分けをする。各グループが自由な発想でネタを出し合い企画を決定する。最も気をつかい苦労するのは「取材とアポ取り」である。連絡の取り方、電話の掛け方、メールの書き方を体験し、「社会における連絡の重要性」を知らされる。取材や編集を経て、以前は人前で話すことが怖かったが、物怖じしなくなり、積極的に自分の意見を言えるようになった。取材先に感謝している（北澤）。

さがまちは、情報紙制作の目標を、①情報誌づくりのノウハウを体験的に学ぶ、②コミュニケーション能力を身につける、③地域への関心を深め地域を知るとしているが、確かに自分も地域を盛り上げるために何かをやってみたいと思うようになった（山根）。

5. 参加者からの質問

質問内容は、「参加学生の募集の仕方」4件、「コンソーシアム事務局の関わり方（学生への働きかけ）」4件、「学生が参加する理由」2件、「参加学生が経験を卒業後どのように活かしているか」1件、「地域課題の発見につながった例」1件、「正課授業との折り合いの着け方」1件、「情報誌の読者の反応」1件、「取材先とのトラブルの例」1件、「事業の費用対効果について」1件。質問先の内訳は、共通2、京都5、さがまち7であった。

質疑に移り、質問が多かった「参加学生の募集の仕方」については、口コミで広がる（南大阪）、事務局から募集案内がHPや各大学に出される（さがまち）。学生への働きかけとも関連するが、「学生が参加する理由」について

は、友達を作りたい(京都)、他大学の学生と知り合いたい(京都)、成長したかった(京都)、学生が有意義だと感じている(さがまち)、マスコミに興味がある(さがまち)。質問にあった見返りなどは埒外で、あくまで自発的な意志によるとの回答が全体を占めた。

「課題解決能力の伸長にどのように役立っているか」との質問には、社会の様々な問題に対して当事者意識で考えるようになった

(南大阪)、課題解決能力の伸長には学生の意見を積極的に取り入れることが重要(南大阪)、以前より深く問題認識をするようになった(京都)、との前向きな回答があった。

6. おわりに

3つの取組の共通点が、「学生の成長」と「地域の創造」を目指していることは冒頭に述べた。学生の成長は、学士力におけるリーダーシップや自己管理能力などの「態度・志向性」、課題発見・解決力などの「統合的な学習経験と創造的思考力」、社会人基礎力における「チームワーク」「行動力」「問題解決力」、「社会的・職業的自立に向けた能力」の育成そのものである。地域の創造は、地域に関心を持ち、地域を誇りに思う機運を学生・市民の間に育む。地域の産業、文化の発展の核となる人材を育成し、地域の活性化とむすびつく。

共通点を押し広げれば、論点は、①学生の能力・態度の育成、②大学(学生)の教育基盤の拡充、③地域との連携・交流の促進、④地域の価値(誇り)の創造に整理される。

今回は、コーディネーターの力量不足から不消化のまま終わった討論だったが、各報告に見られる「学生の成長」の有様や、「地域の創造」に向けられる関心の高さを糧に、機会を得てふたたび「協働によるまちづくり」の意義や将来の発展形について、論点に沿った討論の機会を持ちたいと思う。